

言語・方言の危機の背景

国立国語研究所・言語変異研究領域

木部 暢子

2016年8月25日

言語・方言の危機の要因

- ① 学校教育における方言の扱い
- ② 社会の変化
 - ア 若年人口の都市への集中
 - イ 家族形態の変化
 - ウ テレビの普及
- ③ 自然災害による地域コミュニティの崩壊

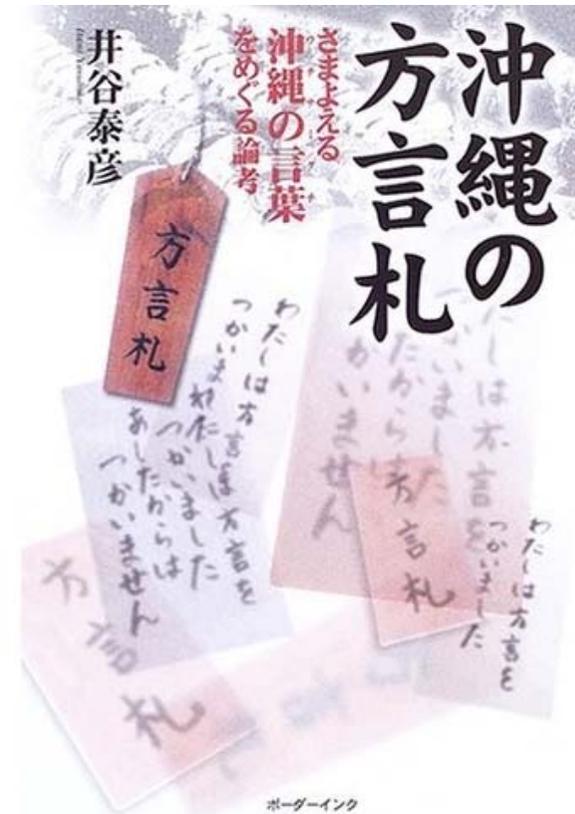
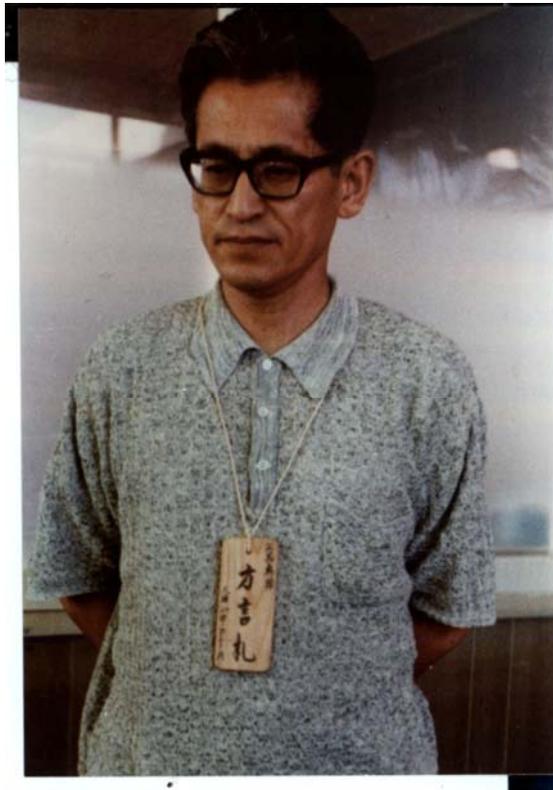
学校教育における方言の扱い

昭和26年(1951)改訂の「小学校学習指導要領 国語科編(試案)」

- ア 幼稚園におけることばの指導はどう進めたらよいか:この時期の話しことばは、著しく地域的で、方言・なまりが多く共通語に遠い。したがって、指導としては、この現実を離れることなく、ごく自然に、その中で理解される程度で、よい模範を示すことに努めなければならない。
- イ 第三学年の国語科学習指導はどう進めたらよいか:教科書や、いろいろな読み物の文を読んだり、ラジオを聞いたりすることによって、自分の使っていることばの中に、幼児語・方言・なまり・野卑なことばなどのあることに気づかせ、だんだんとよいことばや、共通語を使わせていくようにする。
- ウ 第四学年の国語科学習指導はどう進めたらよいか:方言を使わないで話したり、自分の語法の誤りを認めることができるようにする。
- エ 第五学年の国語科学習指導はどう進めたらよいか:できるだけ語法の正しいことばを使い、俗語または方言を避けるようにする。
- オ 第六学年の国語科学習指導はどう進めたらよいか:正しい語法に基いた共通語を話し、俗語や方言はできるだけ避けるようにする。

方言札

- A5版ほどの大きさの厚紙に、「私は方言をしゃべりました」というような文言が書いてある。板の札もある。
- 方言をしゃべった子どもに学校が終わるまで一日中「方言札」を掛けさせる。あるいは、他の子が方言をしゃべると「方言札」をその子に掛け替える。



学校教育における方言の扱いの変化

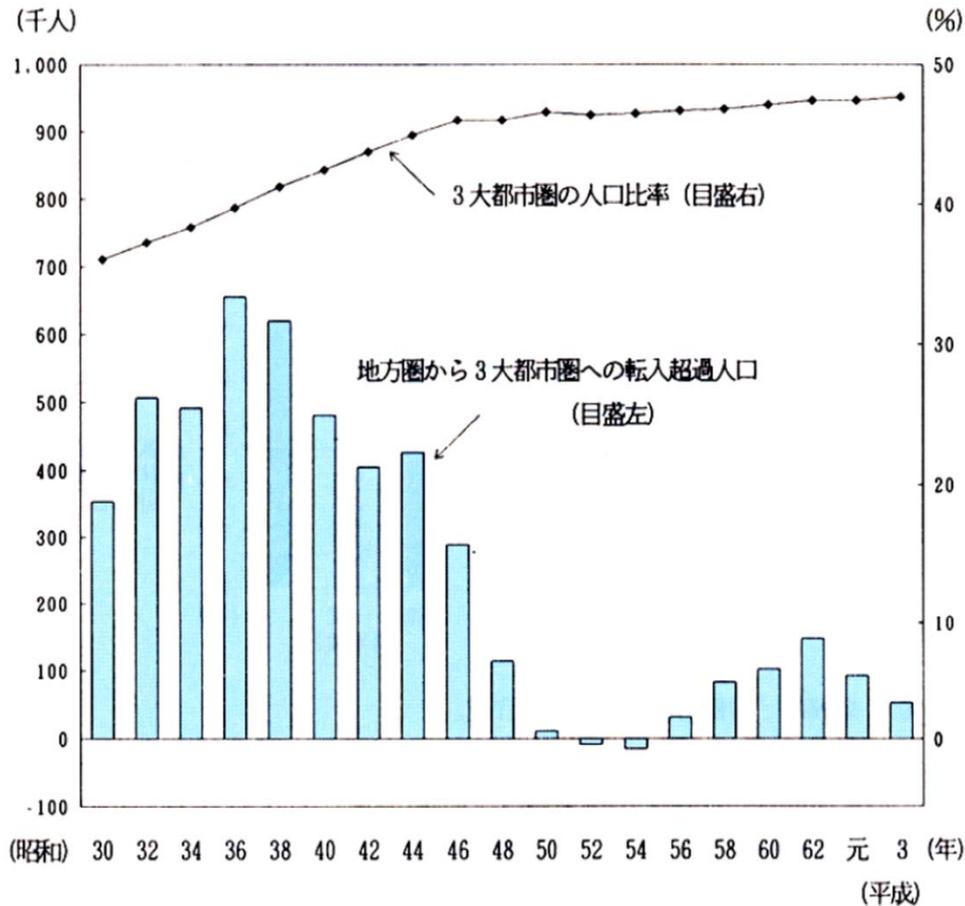
- 学校教育における方言の扱いが大きく変わったのは、1970年ごろである。
- 昭和46年(1971)4月施行「学習指導要領 国語科」
小学校第4学年には、次のように書かれている。

共通語と方言とでは違いがあることを理解し、また、必要に応じて共通語で話すようにすること

- 現行の「学習指導要領」にも受け継がれている。

社会の変化 若年人口の都市への集中

第I-2-1図 高度経済成長期に著しく進んだ都市化の状況



経済企画庁(1993)「国民白書 豊かな交流 人とのふれあいの再発見」

- (備考) 1. 総務庁「住民基本台帳人口移動報告」により作成。
 2. 3大都市圏とは、埼玉、千葉、東京、神奈川、岐阜、愛知、三重、京都、大阪、兵庫の各都府県のことをいう。



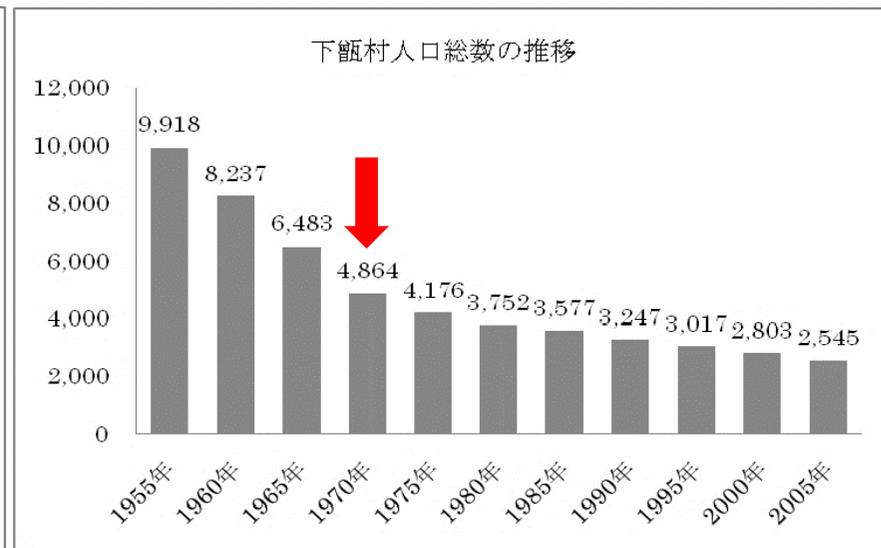
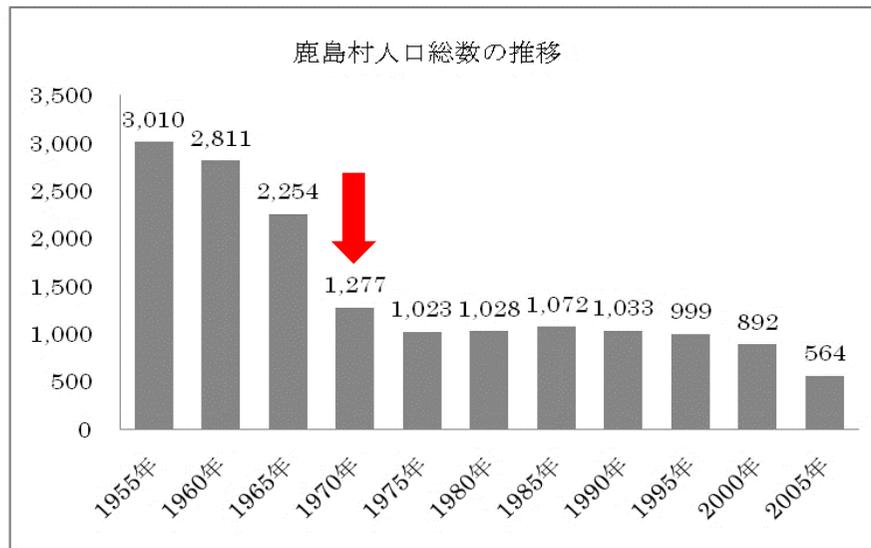
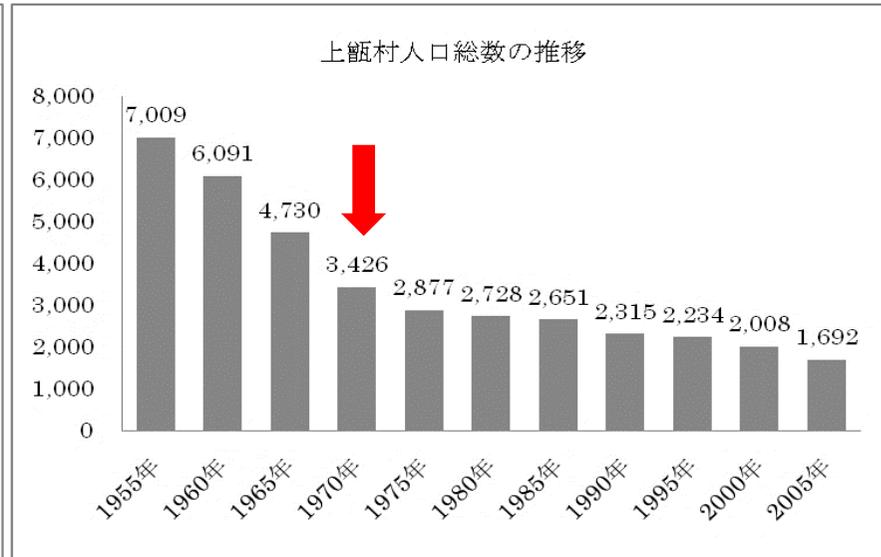
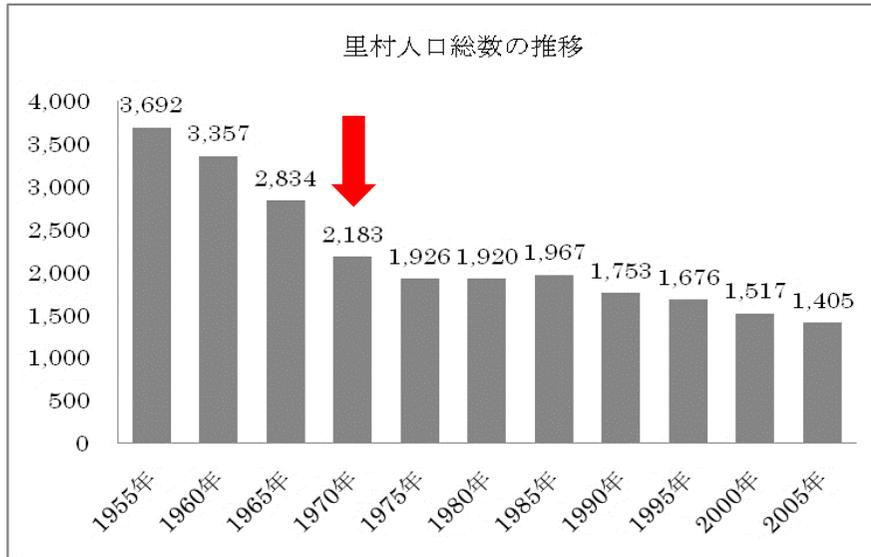
社会の変化 若年人口の都市への集中

・鹿児島県甑島の例

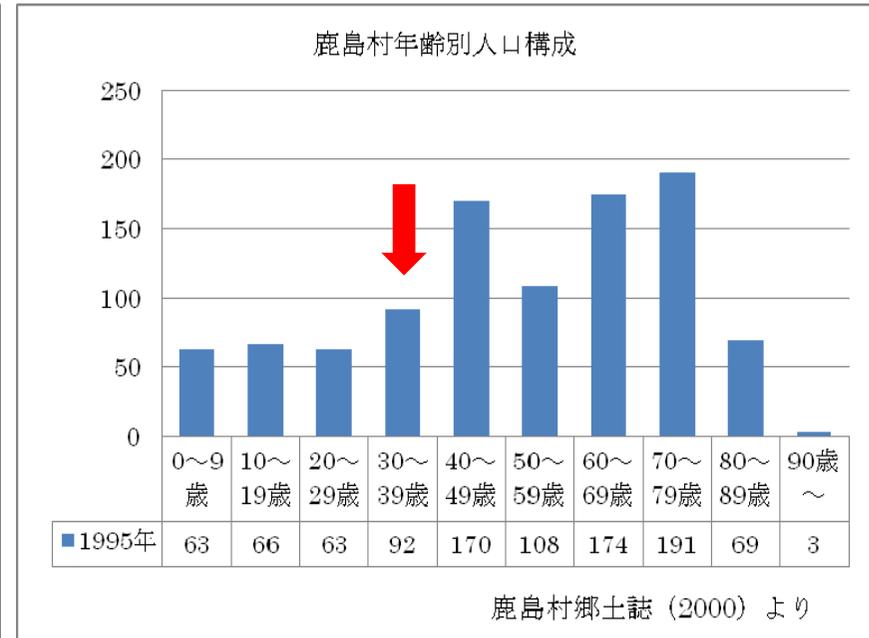
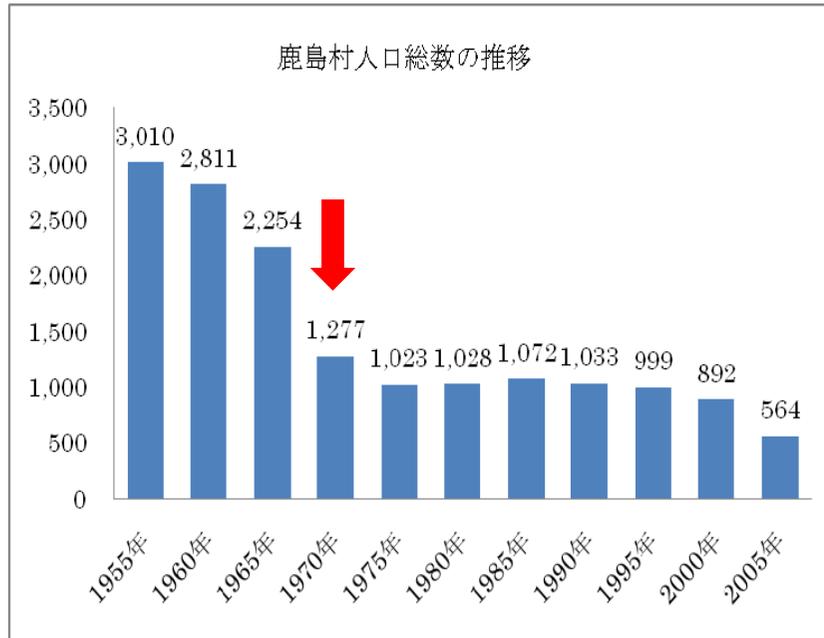


13

甌島の人口の推移



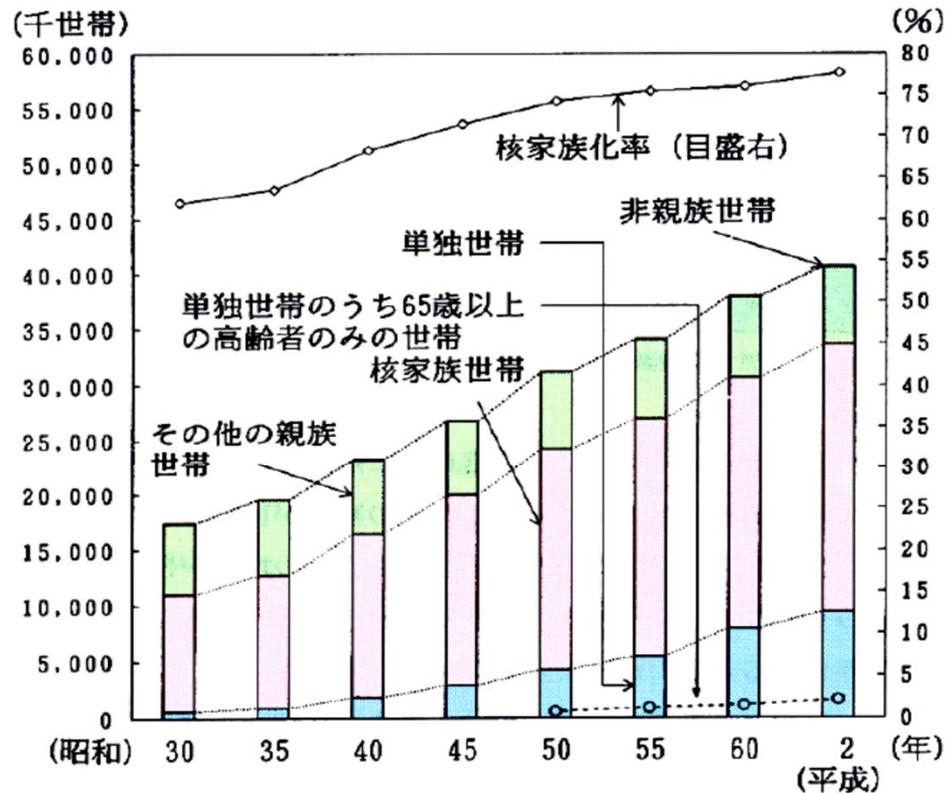
甌島鹿島村の人口の推移



- 1995年の人口構成で、40歳代まで(1970年当時の15歳以上)は、各年代170人以上の人口を保っているのに対し、30歳代(1970年当時の5～14歳)は92人と、上の年代に比べて半減している。
- 人口減の原因は「集団就職で中学校卒業生がほとんど村を去り、また沿岸漁協の不振により家族ぐるみの転出が毎年のように続いた」(『鹿島村郷土誌』63頁)ためである。

社会の変化 家族形態の変化(核家族化)

第1-2-3図 核家族化は進展している



経済企画庁(1993)「国民白書 豊かな交流 人とのふれあいの再発見」

- (備考)
1. 総務庁「国勢調査」、厚生省「国民生活基礎調査」により作成。
 2. その他の親族世帯+核家族世帯を「親族世帯」といい、親族世帯+非親族世帯+単独世帯を「一般世帯」(ただし、昭和55年までは「普通世帯」という)。
 3. 「核家族化率」とは、親族世帯数に占める核家族世帯数の比率である。

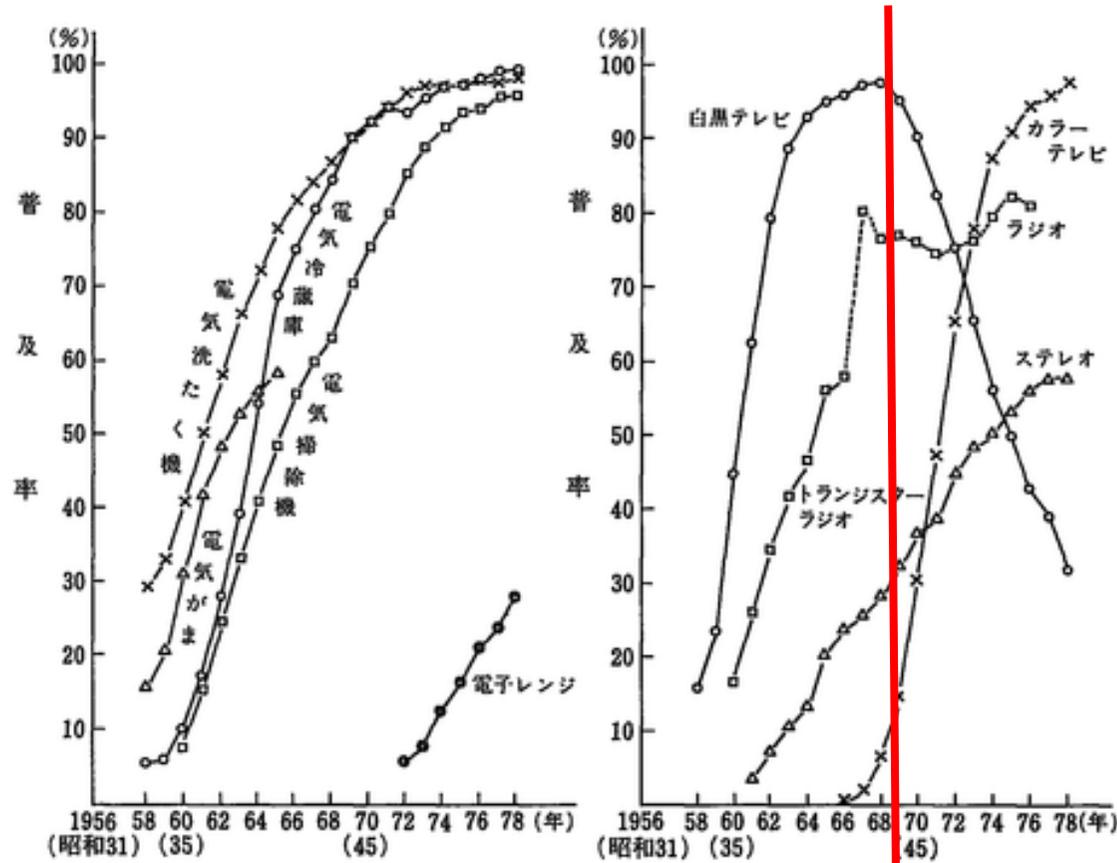
社会の変化 家族形態の変化

結婚形態の変化

- 人の移動により同郷の者同士の結婚が減少し、家庭で方言が使用されることがきわめて少なくなった。
- それまでは、家庭ではもっぱら方言が使用され、子どもたちはそれを聞いて育ってきたが、昭和40年代以降、家庭が方言使用の場でなくなり、子どもたちが家庭で方言を学ぶことが難しい時代となった。

社会の変化 テレビの普及

第1-1-8図 主要家庭電気製品普及率



文部科学省(1993)
「昭和55年版科学
技術白書」

注) 都市の非農家における普及率である。
資料: 経済企画庁「経済要覧」

社会の変化 テレビの普及

- テレビの普及は、人口の都市への集中とほぼ同じ昭和30年代に進み、昭和40年代の最初には、白黒テレビの普及率が100%近くとなった。
- 昭和40年以降に生まれた人は、生後すぐからテレビを通じて共通語に身近に接するという環境が生まれた。
- 家庭が方言使用の場でなくなったという状況と重ね合わせると、昭和40年以降、家庭はもはや方言学習の場ではなく、共通語学習の場となった

自然災害による地域コミュニティの崩壊

- 自然災害による地域コミュニティの崩壊が地域の方言の衰退の原因となることがある。このことは、2011年の日本大震災のときに鮮明となった。
- 言語はそれを話すコミュニティがなければ成立しない。
- 社会変化による地域コミュニティの崩壊は徐々に進むが、災害によるコミュニティの崩壊は急激である。
- そのため、災害後は急速にコミュニティが崩壊し、対応策がたてられないまま方言が衰えていくという状況になる



人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」
平成24年度関西地区シンポジウム報告書 より

災害と言語・方言の関係

◆災害復興には方言が障害になる。

国立国語研究所『東北方言オノマトペ用例集』(竹田晃子)

<http://www.ninjal.ac.jp/pages/onomatopoeia/> ★

- ボランティアの活動現場で「言葉の壁」は深刻な問題だ。(東京新聞2012年5月7日)
- 現地に入った医師からも「患者の言葉がわからず、無力感を覚えた」と聞いた。(2012年3月6日夕刊)

災害と言語・方言の関係

◆外国人に対する情報伝達

- 1995年の阪神淡路大震災のあと、弘前大学人文学部の佐藤和之教授らがその不備を指摘し、「やさしい日本語」が生まれ、現在も改良が重ねられている。
- 弘前大学人文学部社会言語学研究室「減災のための『やさしい日本語』」

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/> 2016年8月閲覧

災害と言語・方言の関係

- ◆2011年の東日本大震災のときには、また、耳の聞こえない人たちへの情報伝達の問題も指摘された。
- 今井彩子氏「音のない3.11～被災地に聞こえない人もいた～」、本田栄子氏「災害時の手話通訳～阪神淡路大震災と東日本大震災～」(2013年12月15日言語・文学委員会、3分科会合同会議)
- <https://www.youtube.com/watch?v=q7KyrjXwqbA>

災害と方言の関係

- ◆一方で、地域コミュニティの再建の時には、方言が大きな力を発揮する。
- 東日本大震災のあと、方言による紙芝居や昔話のかたりの会が東北各地で開催され、地域の人々を元気づけたという報告がある。

読売新聞2013年8月20日朝刊

「そうって家を出たげんちょ(出たけれど)」「弓矢をもっていげ」――。福島県いわき市の被災者向け交流スペースで今月17日に同県双葉町民の集いが開かれ、双葉町の民話などを方言で語る紙芝居作品が披露された。

いわき市の借り上げ住宅に住む同町出身の女性(78)は、「今回初めて見て、ふるさとの生活を思い出した。震災後、いろんなストレスを抱えているが、双葉の方言が聞けて心が和んだ」。「ばんかた(夕方)、おど(赤ちゃん)がいわきでは通じないことが多い」と方言の話で盛り上がった。(中略)

宮城県名取市の「方言を語り残そう会」は、震災後の2011年夏から、仮設住宅を月1回訪れ、集会所でボランティアが、方言を使った紙芝居を披露したり、昔話を語ったりしている。代表の金岡律子さんは「知らない人同士が集まる仮設住宅でもお互いの距離感を縮められるのが方言。高齢者を中心に毎回30人ほどが参加し、楽しみにしているという声も多い」と言う。

(小野仁)

危機言語・方言はなぜ守らなければならないか。

◆ただし、これは諸刃の剣

「仲間意識」と「排他性」は表裏一体

◆災害時における言語・方言の問題、言語・方言のもつ排他性にもかかわらず、消滅の危機にある言語・方言はなぜ、守らなければならないのか？